九位注

上三花

妙花風　新羅、夜半、日頭明なり。

妙と云ぱ、言語道断、心行所滅なり。夜半の日頭、是又言語の及ぶべき処か。如何。然ば、当道の堪能の幽風、褒美も及ばず、無心の感、無位の位風の離見こそ、妙花にや有べき。

寵深花風　雪千山を蓋ひて、孤峰如何が白からざる。

古人云く、「富士山高うして雪消せず」と云り。是を、唐人難じて云く、「富士山深して」云云。至りて高きは深き也。高は限りあり。深は測るべからず。然ば、千山の雪、一峰白からざる深景、寵深花風に当る歟。

閑花風　銀垸裏に雪を積む。

雪を銀垸裏に積みて、白光清浄なる現色、誠に柔和なる見姿、閑花風と云べき歟。

中三位

正花風　霞明かに、日落て、万山紅なり。

青天白日の一点、万山早白遠見は、正花風なり。是は、広精風より秀で、既に得花に至る初入頭也。

広精風　語り尽す、山雲海月の心。

山雲海月の心、満目青山の広景を語り尽す所、広精風の習道に尤これあり。是より前後分別の岐堺なり。

浅文風　道の道たる、常の道にあらず。

常の道を踏で、道の道たるを知るべし。これ、浅きより文を顕す義也。然者、浅文風を以て、九位習道の初門と為す。

下三位

強細風　金鎚影動きて、宝剣光寒じ。

金鎚の影動くは、強動風なり。宝剣光寒きは、冷へたる曲風なり。細見にもかなへりと見えたり。

強麁風　虎生れて三日、牛を食ふ気あり。

虎生れて三日、則勢有るは、強気なり。牛を食ふは麁きなり、といへり。

麁鉛風　五木鼠。

孔子云、「木鼠は五の能あり。木に登る事、水に入事、穴を掘る事、飛ぶ事、走る事。いづれも其分際に過ぎず」云云。芸能の砕動ならぬは、麁くて鉛るなり。

九位習道の次第条条

　中初・上中・下後と云ぱ、芸能の初門に入て、二曲の稽古の条条を成は、浅文風なり。これを能能習道して、既に浅風に文をなして、次第連続に道に至る位は、はや広精風也。爰にて事を尽して、広大に、道を経て、既に全果に至るは、正花風なり。是は、二曲より三体に至る位也。各各、安位感花に至る処、道花得法の見所の切堺也。是は、今までの芸位を直下に見おろして、安得の上果に座段する位、閑花風なり。此上に切位の幽姿を成て、有無中道の見風の曲体、寵深花風なり。此上は、言語を絶して、不二妙体の意景をあらはす処、妙花風也。是にて、奥義之上の道は果てたり。

抑、此条条の出所者、広精風也。是、芸能の地体にして、広く精やかなる万得の花種を顕すところ也。然者、広精より前後分別の岐堺、是にあり。爰にて得花に至るは、正花風に上り、至らざるは、下三位に下るべし。

さて、下三位者、遊楽の急流、次第に分て、さして習道の大事もなし。但、此中三位より上三花に至りて、安位妙花を得て、さて却来して、下三位の風にも遊通して、其態をなせば、和風の曲体ともなるべし。然共、古来、上三花に上る堪能の芸人共の中に、下三位には下らざる為手どもありしなり。是は、「大象兎蹊に遊ばず」と云本文の如し。爰に、中初・上中・下後までを悉成し事、亡父の芸風にならでは見えざりしなり。其外、一座棟梁の輩、至極広精風までを習道して、正花風にも上らずして、下三位に下りて、終に出世もなき芸人共、あまたありし也。結句、今ほどの当道、下三位を習道の初門として、芸能をいたす輩あり。これ、順路にあらず。然者、九位不入の当道多し。

　さる程に、下三位に於て、三数の道あり。中初より入門して、上中・下後と習道したる堪能の達風にては、下三位にても、上類の見風をなすべし。中位広精風より出て下三位に入たるは、強細・強麁の分力なるべし。其外、徒に下三位より入門したる為手は、無道・無名の芸体として、九位の内とも云難かるべし。是等は、下三位を望みながら、下三位にも座段せぬ位也。まして、中三位等なんどに至らん事、思も寄らぬ事也。